

城壁都市イントラムロスの崩壊

東南アジア諸国の経済はいま、どの国をとっても、かつての日本をほうふつとさせる目覚ましい勢いで発展を続けている。この経済発展の特色として、日本における一極集中と同様に、人口の過半数が都市地域に住む、都市型社会への急速な移行があげられる。フィリピンの首都マニラも、こうした流れのなかにある都市のひとつで、その原点は16世紀後半にまでさかのぼることができる。マニラは、海運を通じて日本、中国、インドなどの周辺諸国ばかりでなく、スペイン、ポルトガルなどとも密接な交流があり、まさに当時における情報・物流の中心拠点であった。

マニラはまた、スペインの東アジア植民地支配の根拠地として、その発展の過程では、物質的な面ばかりでなく、宗教的にもスペインの影響を大きく受けてきた。そもそも現在のマニラという都市の原点は、スペインによって築かれた城壁都市イントラムロス（スペイン語で“壁の内”の意）にあったのである。

イントラムロスは、16世紀後半、フィリピン支配を目的に、マニラ湾に面したパシグ川河口左岸地域に建設された城壁都市である。イントラムロス建設の背景は、入植者の安全の確保、植民地統治に向けた宗教活動の拠点づくり、スペイン王国の威厳の顕示という3点から説明できるであろう。

16～18世紀にかけて、植民地フィリピンは、スペインによる中国とメキシコを結ぶ「マニ

ラ・ガレオン貿易」によって、その経済・財政が支えられていた。この貿易は、中国貿易船によって運ばれた絹や陶磁器などを、マニラからガレオン船（帆船の一種）でメキシコに輸出し、おもに銀と交換するものである。これがスペイン人入植者に膨大な利益をもたらす排他的な制限貿易であったため、現地の反感は強まっていった。これがやがて、さまざまな反乱へとつながっていく。

こうしたことを背景に、スペインは植民地の安全を確保し、植民地統治の基盤を確立するために、城壁都市としてイントラムロスを建設する。当然のことながら、イントラムロスは、総督府、大聖堂、学校、病院などの主要都市機能とともに、それを守るための防衛機能を備えることになる。

当初のイントラムロスは、城壁都市と呼べるほど立派なものではなく、やしぶきや木造建築の集落を柵で囲んだ程度のものだったようである。そのため火には弱く、植民地支配の象徴であり植民者の精神的支柱でもある大聖堂の焼失なども起こっている。マニラ・ガレオン貿易を土台にスペインによる植民地支配が強まる一方で、マニラがスペイン領の正式な首府として認められていなかった理由もそのあたりにあった。そのためスペインの植民者は、大聖堂をはじめ主要な建造物の石造化を進め、また、海賊に対する防衛策として、都市全体を頑丈な城壁で囲うとともに、堀を



巡らすなど、防衛機能を高めた城壁都市としてイントラムロス在完成させたのである。

16世紀末、城壁都市イントラムロスの完成によって、スペイン王国は、東アジアにおける恒久的な根拠地として、マニラを正式にスペイン領フィリピン諸島の首府として認めることになる。しかしながら、城壁を含めて石造建築は地震に対しては弱く、地震による倒壊がたびたび起こった。石造建築の再建には建設時と同様に膨大な費用と労力がかかることから、復興にも限界があり、結局は伝統的な木造建築へと逆戻りするようになったのである。スペイン王国の植民地の首府として、その威厳を保ち続けていくためには、防衛面ばかりでなく、災害にも強い都市づくりという新たな課題が生まれたのである。

この課題は、17世紀に入って新しい建築工法が生まれたことで解決することになった。それは、木造と石造のそれぞれの欠点を補うもので、耐火性に優れた石造建築の上に、耐震性の高い木造建築を重ねるというものであった。また、木造建築の厨房をタイル貼りとし、木造ながらも防火性に優れた建物とした。これらにより、イントラムロスは地震に強い城壁都市として再建され、さらなる発展を遂げるようになった。

しかし、19世紀に入ると、城壁都市イントラムロスは大きな転機を迎えることになった。イギリスなどによる海上貿易の活発化に

より、排他的な貿易体制の維持が困難となり、スペイン総督府は貿易自由化政策へと転換することになったからである。

貿易自由化政策は、これまでの、閉鎖的な城壁都市イントラムロスを核とした貿易活動から、より広い空間での活動への方向転換を迫るものであった。いわば守りから攻めへの大転換である。すでに当時のマニラは、イントラムロスの内部より城壁外の集落のほうに人口が多く、潜在的な成長力も高くなってきていた。イントラムロスの城壁都市としての特色は、排他的な制限貿易の時代には、スペイン人入植者の防衛、都市の防災という機能を果たした。しかし自由貿易の時代には、城壁都市に求められていた機能の必要性が薄れるばかりでなく、逆に城壁都市であることが成長を阻害する要因ともなってしまった。こうしてイントラムロスは崩壊の一途をたどり、今日のマニラに遺跡として跡をとどめることになったのである。（参考：日本評論社刊『アジアの大都市4 マニラ』など）

かつて日本が「経済大国」と言われ、経済発展を誇った時代は遠い過去の話となった感がある。日本がこのままイントラムロスと同様の運命をたどらないようにするためには、国や市場の壁を取り払う、新たな自由貿易協定（FTA）の時代に対応し、相互理解と信頼のネットワークに基づく制度や仕組みの改革を推し進めることが必要ではないだろうか。■